



おおきなかぶ

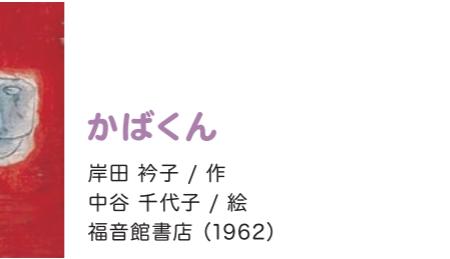
内田 莉莎子 / 訳
佐藤 忠良 / 絵
福音館書店 (1962)

物語のもとはロシア民話で、「おじいさんが植えて、とてもなく大きく育ったかぶ。おじいさん、おばあさん、孫娘、犬、猫、ネズミが、次々と加わって引っ張ると、やっとかぶは抜けました」という実に単純な展開ですが、繰り返しの面白さと必要最小限の簡潔な詞、彫刻家佐藤忠良の力強く骨太な表現によって、刊行以来48年にわたって息の長い人気を保っています。

横長に広がる画面の中で動きまわる人間と動物たちの躍动感。画面からはみ出すほどの巨大なかぶが全画面に効果的に配置され、人や動物との巧みな対比によってその大きさがより強調されます。人物の顔貌や服装にはロシアの民衆の匂いが感じられ、老夫婦の手足の彫刻的表現には、土に生きる農民のたくましさが示されています。

物語のもとはロシア民話で、「おじいさんが植えて、とてもなく大きく育ったかぶ。おじいさん、おばあさん、孫娘、犬、猫、ネズミが、次々と加わって引っ張ると、やっとかぶは抜けました」という実に単純な展開ですが、繰り返しの面白さと必要最小限の簡潔な詞、彫刻家佐藤忠良の力強く骨太な表現によって、刊行以来48年にわたって息の長い人気を保っています。

横長に広がる画面の中で動きまわる人間と動物たちの躍动感。画面からはみ出すほどの巨大なかぶが全画面に効果的に配置され、人や動物との巧みな対比によってその大きさがより強調されます。人物の顔貌や服装にはロシアの民衆の匂いが感じられ、老夫婦の手足の彫刻的表現には、土に生きる農民のたくましさが示されています。



かばくん

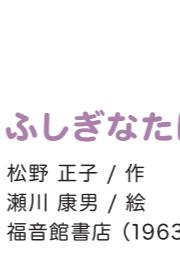
岸田 梓子 / 著
中谷 千代子 / 絵
福音館書店 (1962)

物語のもとはロシア民話で、「おじいさんが植えて、とてもなく大きく育ったかぶ。おじいさん、おばあさん、孫娘、犬、猫、ネズミが、次々と加わって引っ張ると、やっとかぶは抜けました」という実に単純な展開ですが、繰り返しの面白さと必要最小限の簡潔な詞、彫刻家佐藤忠良の力強く骨太な表現によって、刊行以来48年にわたって息の長い人気を保っています。

横長に広がる画面の中で動きまわる人間と動物たちの躍动感。画面からはみ出すほどの巨大なかぶが全画面に効果的に配置され、人や動物との巧みな対比によってその大きさがより強調されます。人物の顔貌や服装にはロシアの民衆の匂いが感じられ、老夫婦の手足の彫刻的表現には、土に生きる農民のたくましさが示されています。

物語のもとはロシア民話で、「おじいさんが植えて、とてもなく大きく育ったかぶ。おじいさん、おばあさん、孫娘、犬、猫、ネズミが、次々と加わって引っ張ると、やっとかぶは抜けました」という実に単純な展開ですが、繰り返しの面白さと必要最小限の簡潔な詞、彫刻家佐藤忠良の力強く骨太な表現によって、刊行以来48年にわたって息の長い人気を保っています。

横長に広がる画面の中で動きまわる人間と動物たちの躍动感。画面からはみ出すほどの巨大なかぶが全画面に効果的に配置され、人や動物との巧みな対比によってその大きさがより強調されます。人物の顔貌や服装にはロシアの民衆の匂いが感じられ、老夫婦の手足の彫刻的表現には、土に生きる農民のたくましさが示されています。



ふしぎなたけのこ

松野 正子 / 著
瀬川 康男 / 絵
福音館書店 (1963)

物語のもとはロシア民話で、「おじいさんが植えて、とてもなく大きく育ったかぶ。おじいさん、おばあさん、孫娘、犬、猫、ネズミが、次々と加わって引っ張ると、やっとかぶは抜けました」という実に単純な展開ですが、繰り返しの面白さと必要最小限の簡潔な詞、彫刻家佐藤忠良の力強く骨太な表現によって、刊行以来48年にわたって息の長い人気を保っています。

横長に広がる画面の中で動きまわる人間と動物たちの躍动感。画面からはみ出すほどの巨大なかぶが全画面に効果的に配置され、人や動物との巧みな対比によってその大きさがより強調されます。人物の顔貌や服装にはロシアの民衆の匂いが感じられ、老夫婦の手足の彫刻的表現には、土に生きる農民のたくましさが示されています。



しょうぼうじどうしゃじぶた

渡辺 茂男 / 著
山本 忠敬 / 絵
福音館書店 (1963)

物語のもとはロシア民話で、「おじいさんが植えて、とてもなく大きく育ったかぶ。おじいさん、おばあさん、孫娘、犬、猫、ネズミが、次々と加わって引っ張ると、やっとかぶは抜けました」という実に単純な展開ですが、繰り返しの面白さと必要最小限の簡潔な詞、彫刻家佐藤忠良の力強く骨太な表現によって、刊行以来48年にわたって息の長い人気を保っています。

横長に広がる画面の中で動きまわる人間と動物たちの躍动感。画面からはみ出すほどの巨大なかぶが全画面に効果的に配置され、人や動物との巧みな対比によってその大きさがより強調されます。人物の顔貌や服装にはロシアの民衆の匂いが感じられ、老夫婦の手足の彫刻的表現には、土に生きる農民のたくましさが示されています。



さむがりやのサンタ

レイモンド・ブリッグス / 作・絵
すがらひろくに / 訳
福音館書店 (1974) ('73)

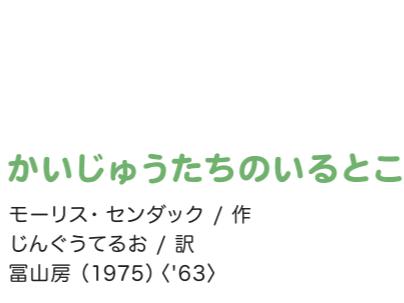
+++++

「やれやれ また クリスマスか！」この冒頭部分に、読者は驚かされることでしょう。太陽が降り注ぐ浜辺で、水着姿でくつろぐ夢から、目覚まし時計でたたき起こされたその人が、あのサンタクロース。おまけに、こんなことを言うなんて！

ブリッグスは、ファンタジーの世界の聖なるサンタクロースを、リアルな実在する人物として、現実の世界に描き出しています。でっぷりとした体つきに白い長い髪、おなじみの赤い服に帽子と、見た目は記号的なサンタクロースそのものですが、寒がりやで暖かい場所で過ごすことに憧れています（『サンタのなつやすみ』には、憧れを叶えたサンタの姿が描かれています）、お酒が大好物、そして愚痴を言いながらも一生懸命働いている、そんな人間味溢れるサン

タの姿には、他の作品とも共通する、日々をせっせと生きる人間に対する作者の愛おしさが感じられます。

マンガのようなコマ割りで、詞はサンタのセリフだけでテンポよく描かれていきます。コマ割りによって、身支度をしてプレゼントを配りに出かけるサンタの一連の動きを滑らかに映し出すだけでなく、家の断面図を縦に並べた4つのコマに分けて描くことで煙突の中を通っていくサンタの動きを追い、コマの大きさの対比によって空を駆けていくサンタの姿をダイナミックに見せるなど、その手法が作品世界をより豊かに表現しています。（S）



かいじゅうたちのいるところ

モーリス・センダック / 作
じんぐうてるお / 訳
富山房 (1975) ('63)

+++++

典型的な「行きて帰りしがたり」。主人公のマックス少年は、悪戯が過ぎたため母親に叱られて夕食抜きで寝室に閉じ込められますが、怒りを燃え上がらせると、部屋が森に変わり、海が押し寄せ、彼はそこから船に乗って一年と一日旅をして「怪獣たちのいる島」へ着きます。そこで怪獣たちを手なづけ、思う存分大騒ぎをした後、母親が恋しくなって空想の旅から戻ってくると、テーブルには母親の温かい夕食が待っています。読者もまたマックスと一緒に、彼の夢の中へ引きずり込まれ、そこでの大騒ぎを目撃し、そして彼と共に夢から目覚めたかのような感覚を味わうのです。こどもは、純真無垢で汚れを知らず、無心に遊ぶという旧来のイメージを抱く者は、センダックのこども観には戸惑うことでしょう。

この作品は、子どもの心理や魂の深奥を探ってイメージ化した虚と実の世界が、何の矛盾もなしにスムーズに入れ替わっていくところに絵本としての面白さがあります。注意深く画面を見ていくと、現実=日常の材料を巧みに使って、ファンタジー=非現

常の世界を構築しているのがよく解ります。「怪獣たち」は母も含めた大人たち、マックス王のテントは、悪戯の大暴れの際に使ったカーテンと椅子、その命令の言葉は、母の諫めの言葉。それぞれ符合を見つけることができます。少年は困難な現実を想像力によって空想の世界に導き、そこで形を変えて難問を解決させることによって、生のエネルギーを取り戻し、再び現実に戻って来ます。読者もまたマックスと一緒に、彼の夢の中へ引きずり込まれ、そこでの大騒ぎを目撃し、そして彼と共に夢から目覚めたかのような感覚を味わうのです。こどもは、純真無垢で汚れを知らず、無心に遊ぶという旧来のイメージを抱く者は、センダックのこども観には戸惑うことでしょう。



木のうた

イエラ・マリ / 作
ほるぶ出版 (1977)

+++++

1本の大きな木を中心にして、周りに生きる動物や植物たちの春夏秋冬の様子を追った作品です。しかし決して「知識絵本」ではありません。1枚1枚の場面が、色彩的にも構成も非常に完成度が高く、ページをめくことによって、読者の想像力や感情を呼び起さざるごとに現れてくる、季節の移り変わりが心地よく、自然の中で生かされている生命が、四季の変化の中で様々な生を営んでいる生き物たちに自己を重ね合わせ、自由に自分の物語を紡ぎ出すことができるのです。

文字のない絵本は、物語が文字で示されない代わりに、読者が絵に描き込まれた情報を解釈し、絵の雰囲気を感じて捉えながら、独自の詞を紡ぎだす楽しみがあります。この作品はまさにそういったイメージを鮮やかに引き出させる佳品と言えるでしょう。

一般に絵本では、ズームアップやズームダウン、俯瞰や仰角等の構図、視点の移動など、いわゆるカメラワークによって画面を演出するのが常ですが、この作品では、視点

はらぺこあおむし

エリック・カール / 作

もりひさし / 訳

偕成社 (1976) ('69)

+++++

主人公は、小さな卵から生まれた青虫。お腹がペコペコだったので、果物やお菓子を月曜日から日曜日まで1週間食べ続けて、1本の樹木という対象のみに焦点をあてるごとに現れてくる、季節の移り変わりが心地よく、自然の中で生かされている生命が、循環して未来永劫に続いてゆくという思想が、題名通りに静かに叙情豊かに歌いあげられています。教科書的な知識偏重の学習では、決して得ることのできない「木のうた」を、私たちはこの絵本で感じることが出来ます。

文字のない絵本は、物語が文字で示されない代わりに、読者が絵に描き込まれた情報を解釈し、絵の雰囲気を感じて捉えながら、独自の詞を紡ぎだす楽しみがあります。この独特的な絵肌を持つ表現は、実は、ティッシュペーパーに絵具で彩色して、それをカットして貼り合わせるという、コラージュの手法が使われています。そのユニークな手法と、カールの個性的な色彩感覚が、独特の雰囲気を作りだし、見る者の眼に柔らかく暖かい印象を与えるのです。

この絵本が日本で翻訳された当初は、穴あき絵本とか仕掛け絵本の分野に入れられてしまい、多少違和感を持って受け取られ